

# 正倉院文書からみた 『延喜式』の器名世界

From *Shōsō-in* Documents to *Engi Shiki*: A Comparative Study of  
Tableware Names in Ancient Japan

森川 実

MORIKAWA Minoru

- ① 器名考証の略史と目的
- ② 正倉院文書所載土器の器名考証
- ③ 『延喜式』主計式上の土器・陶器調納規定とその年代
- ④ 『延喜式』の器名群
- ⑤ 『延喜式』的器名世界への架橋
- ⑥ 結論

## 【論文要旨】

奈良時代の正倉院文書には、東大寺写経所（および奉写一切経所）において、経師らの給食で用いられた食器の器名が多数見えている。本論では写経事業ごとに食器の入手過程や食器の組み合わせについて検討をくわえ、経師らに支給された食器が4～6種類の土器と、一部の木製食器からなることを明らかにしたうえで、これらの器名と平城宮・京出土の土器とを対比させ、奈良時代における碗・杯・盤がいかなる食器であったかを考証した。その結果、天平宝字年間の東大寺写経所では、陶碗（水碗・麦碗）と羹坏・饗坏・塩坏、陶片盤など、陶器中心の食器が用いられたことを論証し、このうちの水碗と麦碗、および饗坏と塩坏との区別があいまいであることを明らかにした。いっぽう、宝龟年間の奉写一切経所では、奉写一切経司から現物で支給された食器の多くが土師器であったことから、土鏡形・窪坏・片坏（のち枚坏）・土盤と、陶枚坏・陶盤を混用していた。宝龟4年1月の告朔解案で土片坏が土枚坏へと突如書き換わるのは、奉写一切経所において、その前年からにわかにも多用されるようになった土窪坏の影響と考えられる。このようにして、奈良時代末に成立した窪坏・枚坏セットは土師器に固有の組み合わせで、『延喜式』大膳式ほかに見える平安時代の食器構成に受け継がれる。

『延喜式』所載の器名群にかんしては、おもに主計式が書かれた年代について、既往の学説を検討したところ、大方が奈良時代から平安時代初頭にかけての時期を想定している。しかし、正倉院文書の器名群と直接比較し、共通点と相違点を整理した研究事例はほとんどない。そこで正倉院文書の器名群と、『延喜式』の器名群との比較を試みた。その結果、土師器のほうでは、奉写一切経所関連文書（宝龟年間）に頻出する鏡形・窪坏・枚坏・片盤という組み合わせを『延喜式』大膳式・齋宮式の各条文でも確認し、窪坏と枚坏との多用が、奈良時代後半から平安時代にかけて通有の現象であったことを明らかにした。いっぽう、主計式上の器名群には窪坏が見えず、平坏にあたる食器もまだ「片坏」と書かれていることから、窪坏が出現する前（奈良時代初頭から前半）の貢納規定を反映していると考えられる。つまり土師器食器の器名群は、主計式上（奈良時代前半）→奉写一切経所関連文書など（奈良時代後半から末）→大膳式ほか（平安時代初頭）という相対順序で矛盾なく整理できる。

これに対し、陶器のほうは正倉院文書と『延喜式』とで、器名群の共通点が少ない。前者の器名は麦碗・水碗、羹坏・饗坏・塩坏と、その用法を暗示する用途名称を含むのに対し、後者の器名には管坏・深坏・短女坏・脚短坏などと、その器形を思わせる器名が多い。両者に共通するのは水碗や饗坏（羹坏）などの一部にかざられる。2つの器名群がいかなる関係にあったかがまだ明らかでないため、『延喜式』所載陶器の器名考証はできなかったが、飛鳥時代後半から奈良時代半ばの須恵器食器を用いて陶管坏の考定を試みた。

【キーワード】 器名考証、正倉院文書、東大寺写経所（奉写一切経所）、『延喜式』、土窪坏・土枚坏